

天国の夫の 手紙

あの時言えなかったこと、
今だから話したいこと……
あなたに、伝えたい。

河野浩一・編

天国の夫の手紙

あの時言えなかったこと、
今だから話したいこと……
あなたに、伝えたい

江苏工业学院图书馆
藏书章

— 青浩 — 編

「天国の夫」への手紙

編 者……

河野浩一

発行者……

宇野文博

発行所……

株式会社 同文書院

〒112 東京都文京区小石川 5-24-3

TEL (03)3812-7777 FAX (03)3812-7792

振替 00100-4-1316

印刷所……

株式会社 新日本印刷

製本所……

東京美術紙工

Printed in Japan

ISBN4-8103-7421-1

●乱丁・落丁本はお取り替えます

●愛情と思い出がぎっしり詰まった
「亡き夫」へ綴った12の手紙

日本は今、急激に高齢化社会へと向かっています。人生五〇年といった時代からすれば寿命は二倍近くも延びました。しかし、それは同時に、老後をどう生きていくかが、これまで以上に大きな問題となってくるということです。

あなたの考える老後とは、どんな老後でしょうか？ 夫婦揃って仲睦まじく健康に暮らすこと。結婚し、子供を育て、様々な苦労を共にした夫と妻が、おだやかで満ち足りた余生を送る、そんな老後を望むことは、ごく当然のことともいえるでしょう。

しかし、すべての人が、そうした人生を送れるわけではありません。悲しいことですが、病気や事故といった避けようのない死によって、愛情を誓い合った人生の伴侶と別れ別れにならなければならないことがあることも、また事実です。

そうしたとき、私たちは、その悲しい体験をどうやって乗り越え、そして第二の人生をどう生きていけばいいのでしょうか？

本書には、一二人の、夫を亡くされた妻たちが登場します。彼女たちは、いかにして夫を亡くし

た辛さや悲しみを乗り越えてきたのでしょうか？　そして、これからの人生をどう生きようとしているのでしょうか？

彼女たちの生き方は、実に様々です。また、当然のことながら考え方もひとりひとり違います。しかし、どなたの場合を見ても、悲しみを乗り越え、毎日を真摯^{しんし}に明るく生きようとする、とても前向きな姿勢がうかがえます。

二人の未亡人の方々が書いた「天国の夫への手紙」……共に暮らした日々の思い出や、簡単には言い尽くせない様々な想いが詰まった一通の手紙は、きつと、あなたの心に何かを教え、何かを伝えてくれることでしょう。また、彼女たちの生き方は、多くの夫を亡くした妻たちへの応援歌となってくれることでしょう。と同時に、現在、若く元気で頑張っている夫婦にとっても、本当の夫婦の結びつきとは何か？　また、夫婦それぞれが、互いに認め合い、助け合いながら自分らしく生きるということはどうかを、改めて考えるきっかけを与えてくれるに違いありません。

あまりにも価値観が多様化してしまった現在、ふと自分を見失いそうになることも少なくありません。そんなとき、自分にとっての本当の幸せはいったい何なのか、どんな夫婦関係を望んでいるのか、まず、あなた自身の心から見つめ直してみてはいかがでしょうか？　二人の妻たちがやってきたように……。

「天国の夫」への手紙◎目次

逸見晴恵さん／アナウンサー・逸見政孝さん夫人 7

大杉芳子さん／プロ野球選手・大杉勝男さん夫人 37

井上和子さん／コメディアン・レオナルド熊さん夫人 55

園山宏子さん／漫画家・園山俊二さん夫人 77

蔵間弥生さん／元大相撲・蔵間龍也さん夫人 97

小田ハマ子さん／喜劇役者・鳳啓助さん夫人 119

清水幸子さん／作家・胡桃沢耕史さん夫人 137

山川穆子さん／アナウンサー・山川千秋さん夫人 159

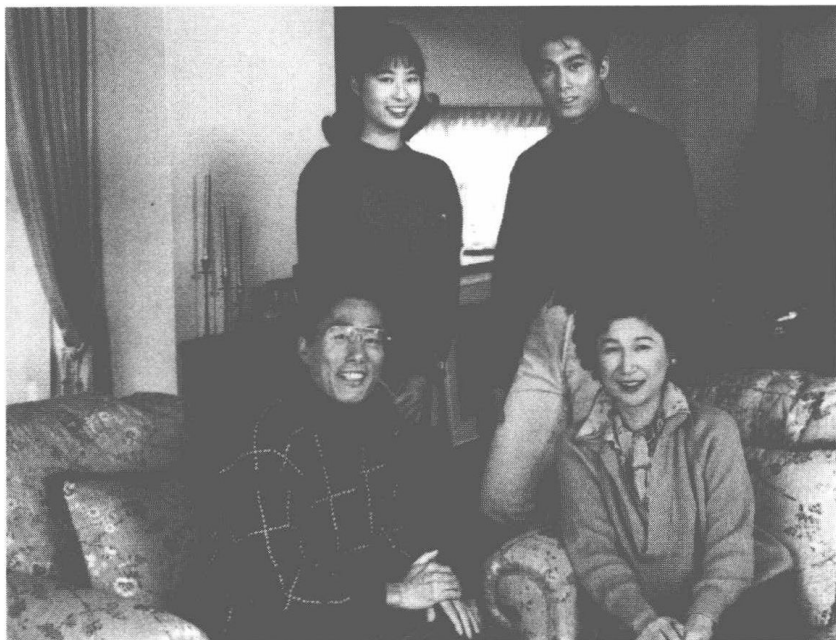
繁田真起子さん／作曲家・三木鶏郎さん夫人 175

高橋光代さん／俳優・高橋悦史さん夫人 197

猫田禮子さん／バレーボール選手・猫田勝敏さん夫人 221

仁科克子さん／俳優・川谷拓三さん夫人 239

逸見晴恵さん（アナウンサー・逸見政孝さん夫人）



逸見さんが亡くなる年、
最後に撮った家族写真

一九四七年生まれ。人気アナウンサーだった逸見政孝さんと一九七〇年結婚。逸見さんは、一九九三年一二月二五日、胃がんのために死去（享年四八歳）。家族は、長男・太郎さんと長女・愛さん。

パパという大黒柱を失ってから、我が家は大きく変わりました。今、私は、あなたに代わって、講演活動をして逸見家を支えています。講演ではパパの闘病のこと、それからパパの死から学んだ知恵について話しているんですよ。

それにしても、こうやって講演する私の姿を見たら、パパはなんていうのかしら。きっと、「ああ、きみが人前で話すところなんて、恥ずかしく見ていられないよ」って、いうんじゃないかしら。

でも、こんな私の話でも、『ご主人が亡くなったあと、メソメソ泣いているだけじゃなくて、頑張って未来を切り開いている姿を見て、身につまされました』といただくさる方や、『私も、あなたと同じように夫を亡くしたんですけど、あなたの話を聞いているうちに、自分でも何かできそうだな、と勇気が湧いてきました。ただ泣いているだけじゃダメなんです』といったださる方と、本当にいろいろです。

私みたいな素人が話すことで、多少でも役に立って、人を勇気づけることができるのかなと思うとうれしくなります。でも、もし、パパが亡くならなければ、こんなふうに入様の前で話すようになることはなかったでしょうね。だって、あなたが生きていた頃は、私はいつも、あなたの脇役だったわけですから……。

一度も社会に出ないで、あなたと結婚。でも、主婦の仕事って成果が目に見えるものではないでしょう。どんなに床をピカピカに磨いても、その努力に対して報酬が得られるわけではないし、やってもやってもきりがない。だから、私には、主婦の仕事が、そんなにおもしろいことには思えなくて、社会に出て何かやってみたいということはずっと思っていました。でも、あなたの口癖は『女は家について、一流の主婦になりなさい』。だから私は、主婦業に専念して働かなかったんです。それが、ある日突然、あんなことになって……。

私は本当に途方に暮れてしまったんですよ。だって家も建てたばかりで、借金

もたくさんあったんですもの。

だから、パパが亡くなったあと、不動産屋さんを介して、この家を売りに出したこともあったんですよ。

でも、家を見に来てくれた方に、家中を案内して、〃ここの床には、こういう材質の木を使っているんですよ〃とか〃ここの部分を作るのには、設計のときにこんなに苦勞をしたんですよ〃とか、一生懸命説明しても、見に来てくれた人には、私のそんな思いは関係ないんですよね。どんなに私が一生懸命説明しても、『ブーン、そうなんですか』っていう感じでね。そりゃ、そうよね。その人たちは、初めてこの家に来たわけだし、他人が作った家ですから、私の説明にも関心を示さないし、感動もないんです。当然、この家に対する私の思いも理解なんかしてくれない。

そういうのを見ていたら、なんだか腹がたってきちゃって……。どうして、こ

んななんの関係もない人に大切な家を売らなくちゃいけないだろうって思えてきて……。逆に、絶対に売るもんか！　って思うようになった。これから先、どんな人がきて家を買いたいといってくれても、きっと私たちの思いを充分に理解してくれる人は現れないだろう。そう思ったら、他人に渡すのは絶対にいや。どうかして、この家を守りたいと思うようになったんです。

私にとっては、この借金がバネになりました。なんとかして、借金を返さなくちゃいけないという思いで、パパが亡くなってから一日たりとも泣いて過ごした日はありません。

それにね、自分の力でなんとかやってみようとする、不思議な力が働くのかしら？　ものごとが、どんどん、いい方向にいくんですよ。それは、きっと、パパが強い信念をもって、天国から、『この家を手放すなよ』っていつてくれているからだと思います。

パパは何も、いい残さないで死んでしまいました。何一つ、書き残したのもありませんでした。メモすらも……。

でもね、〃家を手放すな〃ということだけは、絶対にいたかったんだと思うんです。そう思うからこそ、私は頑張っていられるのかもしれないね。

ここまでやってこれたのも、私が〃逸見政孝の妻〃だから……。

パパが亡くなってから、いろんな人と出会って、改めてパパの偉大さを感じています。そして、心から思うんですよ。私は〃逸見政孝の妻〃で、本当によかったってね。

逸見晴恵

“ドラマならいいのに……”

レギュラー番組を七本も抱えていた、人気タレントの逸見政孝さんが、突然の記者会見を行ったのは、平成五年九月六日のことだった。

詰めかけた、約一〇〇人の報道陣を前に、逸見さんは、静かに口を開いた。

『私が冒されているほんとうの病名は……がんです』

一斉にカメラのフラッシュが光り、けたたましいシャッター音が響いた。報道陣すら、その告白に動揺しているようだった。誰一人として、声をあげようとしないうる緊迫した会見会場に、逸見さんの、淡々とした冷静な声が流れていった。

『このままでは一年間もたないといわれました。一年後に亡くなるのは、本意ではありません。一三年前にたつた一人の弟をがんで失いました。もう一人残った息子までがんでもっていかれるのは、両親にとって忍びないことだと思っています』

そして彼は、臆することなく、いいきった。

『ここで三か月の休みをいただいて闘おうと思います。公表したということは、自分これからがんと闘うのだといいきかせるためです』

がんは、医師が本人に告知することさえ躊躇するほどの病である。告知すべきかせざる

べきか、また、患者本人が告知に耐えられるのか耐えられないのか、また、その治療法について、手術すべきか否かなど、専門家の間でも、さまざまな意見が交錯しているのが現状だ。

だが、逸見さんは、自分ががんであることの恐怖を乗り越え、あえて、『生還すること』を会見の場で誓ったのだった。

この会見は、多くの人々の共感を集めた。

だが、会見の様子が映しだされたテレビの前で、晴恵さんはただただ、涙に暮れていた。となりにいた娘の愛さんは、泣きながらつぶやいた。

『とてもよくできたドラマみたい』

その愛さんの言葉に、晴恵さんはこう応えた。

『ドラマならいいのに』

奇跡を信じた闘病宣言

逸見さんのがんが発見されたのは、平成五年一月一八日のことだった。定期検診の結果、胃がんと診断されたのだ。そして、二月四日には胃の三分の二を切除する手術に踏み切った。『早期がん』は手術で治るものと信じていた。